

さんじゅうはちのつば

# 三十八坪横穴群A群

## 発掘調査報告書

1988

掛川市教育委員会





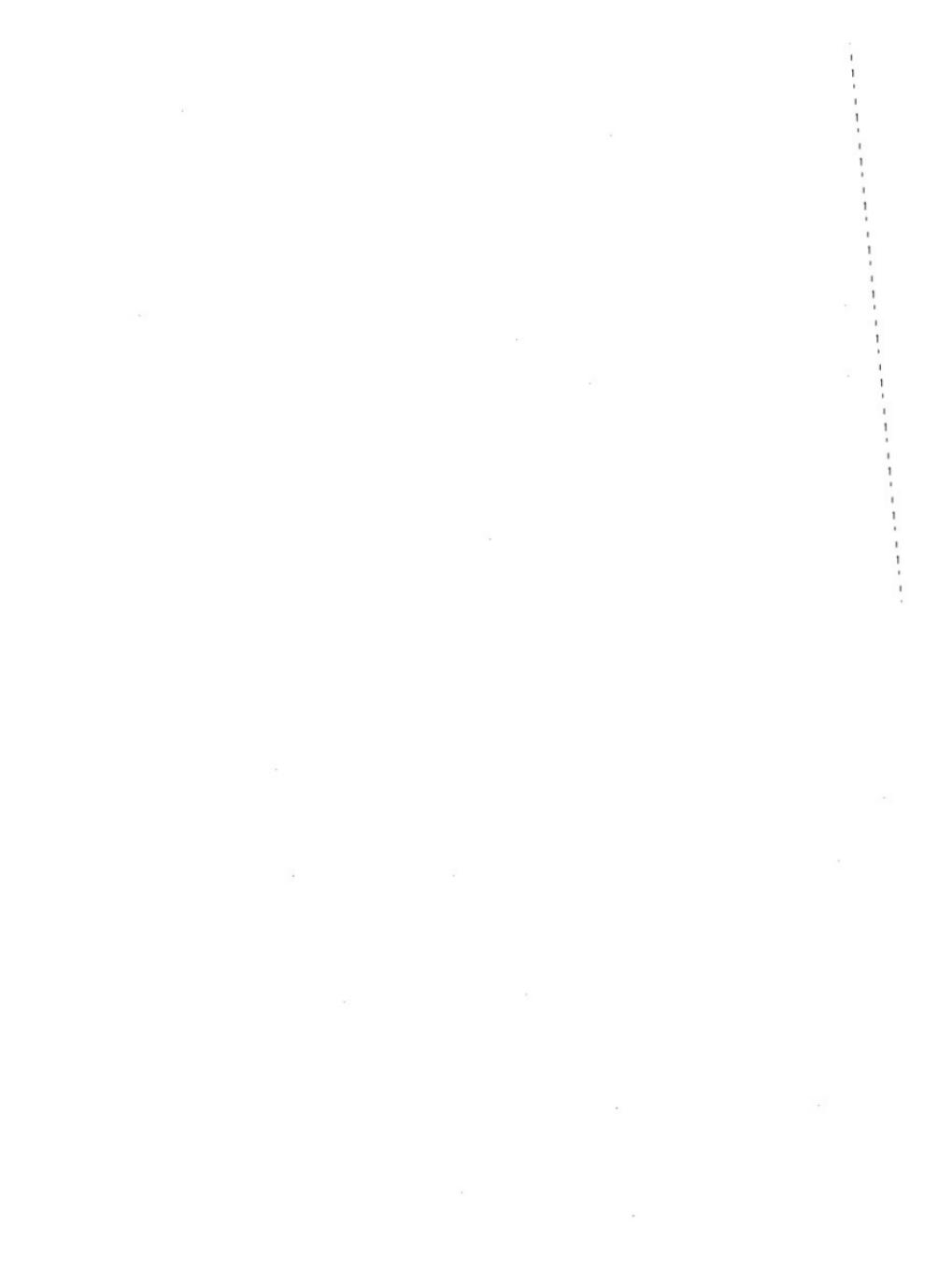


# 三十八坪横穴群A群

発掘調査報告書

1988

掛川市教育委員会



## 序

### 遺跡は文化・遺物は心

掛川市域は自然環境が豊かであったことから、原始・古代からの埋蔵文化財が多く包蔵されていることで知られています。これらは貴重な文化遺産として子孫に遺し伝えるため、文化財保護法に基づいて積極的にその保護・保存と活用をはかることが私たちに課せられた責務と考えております。

ここ数年掛川市域においても年ごとに自然環境の変化が進み、埋蔵文化財に対して少なからず影響を与えつつあり、その取り扱いが大きな問題となってきております。なかでも、掛川市域の特徴としてあげられる横穴墓の包蔵地は、盗掘を容易にする環境に変化し、それに伴なって封土の崩落など、防災上からも緊急に記録保存の措置をとらざるを得ないものも少なくありません。

このたびの発掘調査は、土地所有者の深い理解によって周到な準備を経て実施されたのであります。発掘調査は慎重に行われ、その結果、6世紀後半から末期にかけての横穴墓から人骨、土器、鉄製品が数多く発掘され、往時の墓制などのようすを知る貴重な手がかりを得ることができました。

地道な発掘調査の成果を積み重ねて、往古の人々の生活や社会を解明することは、私たちの生活は祖先の築いた文化遺産の基礎のうえに成り立っており、将来の文化の創造のためにも、また、潤いのあるまちづくりのために欠くことのできないものであります。そして自然環境や歴史的環境に十分配慮をしてまちづくりを進めるためにも生かされていかなければならないと考えております。

最後に、本書の刊行にあたり、関係者各位の御指導に対し厚く御礼申しあげます。

昭和63年3月吉日

掛川市教育委員会

教育長 伊藤昌明

## 例　　言

1. 本書は、昭和62年5月20日から昭和63年3月31日まで実施した静岡県掛川市大池三十八ノ坪2182-1に所在する三十八坪横穴群A群の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、横穴の盗掘防止と自然崩壊予防などの目的で行なわれた緊急の発掘調査で、国および県の補助金を得て掛川市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査では、土地所有者の後藤ちゑ子氏には、埋蔵文化財に対するご理解とご協力を得ている。
4. 発掘調査は掛川市教育委員会の松本一男が担当し、現地調査では市内在住の戸塚和美君に、また整理作業では袋井市在住の前田庄一君の協力を得ている。
5. 現地作業ならびに整理作業では、次の方々の参加を得ている。

戸塚和美・鈴木辰江・長谷川幸子・鳥居鈴江・松浦せい子・村松さと・大場せつ・鈴木きの・石巣まつ・井野鈴江・鈴木たま・松井たつ・松井しか・堀井かね・高柳きわ・松井田鶴子
6. 発掘調査ならびに本書作成にあたり、次の方々からご協示いただいた。記して感謝の意を表したい。

平野吾郎・川江秀孝・吉岡伸夫・鈴木基之・佐藤正知・松井一明（順不同）  
特に吉岡伸夫氏からは鉄製品についてご教示をいただいた。
7. 本書の編集・遺物の実測およびトレース・構造のトレースは前田が担当し、執筆は松本・戸塚・前田が分担して行なった。
8. 発掘調査事業業務は、掛川市教育委員会教育長伊藤昌明・社会教育課長安達啓・文化係長岩井克允のもとに社会教育課が所管した。
9. 調査によって得た資料は、すべて掛川市教育委員会が保管している。

## 凡　　例

1. 掘図における方位は、磁方位を示す。
2. 遺物番号は、掘図と写真図版とで共通する。

# 目 次

序	
例 言	
凡 例	
I 発掘調査と遺跡の概要 .....	2
1. 調査に至る経緯と調査の目的（松本） .....	2
2. 調査の方法と経過（松本） .....	2
3. 地理的・歴史的環境（前田） .....	3
II 調査の内容 .....	5
1. 遺構（戸塚） .....	5
2. 遺物（前田） .....	11
i) 土 器 .....	11
ii) 鉄製品 .....	15
iii) 玉 類 .....	15
III まとめ（松本） .....	16

## 挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡分布図 .....	1
第2図 横穴配置図 .....	4
第3図 第1号墓実測図 .....	6
第4図 第2号墓出土遺物平面実測図・第2号墓実測図 .....	7
第5図 第3号墓出土遺物平面実測図・第3号墓実測図 .....	9
第6図 第4号墓実測図・閉塞実測図 .....	10
第7図 出土土器実測図(1) .....	12
第8図 出土土器実測図(2) .....	13
第9図 出土鉄製品実測図 .....	14
第10図 出土玉類実測図 .....	15

## 図版目次

- 図版 I (上) 調査前全景(西から)  
(下) 調査終了後全景(南から)
- 図版 II (上) 1号墓(右)・4号墓(左)  
(中) 2号墓(右)・3号墓(左)  
(下) 2号墓人骨出土状況
- 図版 III (上) 3号墓遺物出土状況  
(中) 4号墓遺物出土状況  
(下) 4号墓閉塞状況(玄室内から)
- 図版 IV (上) 4号墓閉塞状況(羨門側から)  
(下) 4号墓閉塞石除去後の状況(玄室内から)
- 図版 V 出土遺物①
- 図版 VI 出土遺物②



#### 遺跡地名

- 1.三十八坪横穴群A群
- 2.長福寺古墳群
- 3.宮坂横穴群
- 4.古戦横穴群
- 5.楠ヶ谷横穴群
- 6.天段古墳群
- 7.別所横穴群
- 8.美人ヶ谷古墳群
- 9.石ヶ谷古墳群
- 10.平塚古墳
- 11.鰐原横穴群
- 12.岩谷横穴群
- 13.梅ヶ谷横穴群
- 14.西谷田横穴群
- 15.山麓山横穴
- 16.字洞ヶ谷横穴
- 17.岡津横穴群A群
- 18.岡津横穴群B群
- 19.本村横穴群A群
- 20.本村横穴群B群
- 21.上山古墳群
- 22.丈山横穴群
- 23.大谷代横穴群
- 24.南坪・新田横穴群

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡分布図

# 第Ⅰ章 発掘調査と遺跡の概要

## 1. 調査に至る経緯と調査の目的

三十八坪横穴群の存在が知られるようになったのは、そう古いことではない。国道1号線掛川バイパスが建設予定され、昭和51年に事前の発掘調査が行なわれ以来のことである。その後昭和55年に掛川市海洋センターB&G体育館が建設される際にも発掘調査が行なわれ、三十八坪横穴群の広がりが確認されるとともに、横穴群の所在する山の尾根にそれよりも古いと思われる古墳群が存在することが確認されたのである。

今回発掘調査を行なった地点は、掛川バイパスとB&G体育館のちょうど間に挟まれた西向き開口する谷部で、横穴は谷の奥西向き斜面部と南向き斜面部とに検出した。

この横穴群は、掛川市街地から北西の方向に2km程行った所に位置する山間に所在しており、横穴群のすぐ南側には掛川バイパスが走っている。したがって、掛川バイパスを掛川市大池インターから西郷インターの間を車で走ると、北側の山斜面に横穴群を確認することができる。

今回の発掘調査は、昭和51年に発見されて以来開口していた1号横穴とその周辺に存在する他の横穴の盗掘防止と、自然崩壊予防などの目的から、国および県の補助金を得て掛川市教育委員会が行なった発掘調査である。

## 2. 調査の方法と経過

今回の調査は、調査地点が山の急斜面で雜木等が数多くあり、少ない予算の中で出来る限り迅速に作業を進めることから、表土の剥ぎ取り作業と横穴の存在確認作業を重機使用により行なった。表土の剥ぎ取りは堅い岩盤の地山面を滑らすように行ない、地山面の地層の乱れた地点において横穴を確認した。この作業において確認した横穴は、今回調査を行なった4基の横穴である。

重機の使用を終えた後、人工による重機掘削面の精査作業、そして各横穴の調査に入った。調査ならびに本報告で呼称する横穴の番号は、掘削を行なった順に命名した。

出土した遺物の取り上げと横穴の実測は、それぞれの横穴の奥壁中央と玄門中央を結んだ線を基準として奥壁から50cm毎に直交する線を設定し行なった。

現地での図面は、遺構の展開図・遺物出土状況図等すべて10分の1縮尺で作成した。

写真による記録は、プローニーサイズ(6×7)原画白黒、35mmサイズ原画白黒・カラーリバーサル撮影により行なった。

次に、現地での発掘調査の経過を日程をおって記述しておく。

昭和62年 5月20日～25日	重機による山斜面の表土剥ぎ取り作業・横穴確認作業
5月26日～30日	重機による剥ぎ取り面の掘削・精査
6月1日	1号横穴～4号横穴個々の掘削・実測作業、横穴群全体の位置関係図の作成
～7月4日	
7月6日～8日	横穴群全体の完掘精査・写真撮影
7月9日～10日	現地撤収作業

### 3. 地理的・歴史的環境

掛川市は、南に小笠山、東に牧之原台地に続く丘陵、北に遠く赤石山脈から連なる丘陵に取り囲まれ、その間に原野谷川・逆川をはじめとする中小河川により形成された小さな沖積平野が広がっている。沖積平野の端には中小河川により開析された小さな谷が無数に丘陵にはいり込んでいる。

この小さく開析された谷に、この地域の後期古墳を特徴づける横穴は数多く穿たれている。今回報告する三十八坪横穴群A群も例外ではない。

掛川市域の後期古墳は、横穴式石室と横穴がある。

現在市内で確認されている横穴式石室墳は、長福寺古墳群（3基）・萩ノ段古墳・美人ヶ谷古墳群（6基）・石ヶ谷古墳群（4基）・平塚古墳・天殿古墳群（昭和62年発見、2基と推定）・上山古墳群（7基）等がある。これらの横穴式石室墳のうち、平塚古墳・天殿古墳群は首長墓と考えられる。

横穴式石室墳から成る群集墳は、遠江の他の群集墳同様、早くても6世紀後半～末葉が築造開始の時期になるのではないかと思われる。

一方横穴は、掛川市内で約240基確認されている。この横穴の形態は、断面形により尖頭形とドーム形に分けられる。

尖頭形の横穴は、市内の北から南まで分布しているが、ドーム形は小笠郡下には多数見られるものの掛川市内では南部に一部みられるにすぎない。

今回調査した三十八坪横穴群A群が、掛川市域におけるドーム形横穴の北限ということができる。三十八坪横穴群A群の北には岩谷横穴群、北西には鶴原横穴群、北東には西谷田横穴群という尖頭形の横穴群があり、あたかも三十八坪横穴群A群は尖頭形横穴により包囲されているように感じる。

地理的条件が悪く、基數も少ない三十八坪横穴群A群が、6世紀後半～末葉という中遠地域の群集墳の初現期に築造されている点は、形態・立地を考える上で大きな問題点といえよう。

最後に、掛川市域における後期古墳を考える上で問題となる点を2つあげてみたい。

ひとつは、横穴式石室墳と横穴の併存である。横穴式石室墳から成る群集墳の長福寺古墳群と、この長福寺古墳群から約1.2km離れた宮坂横穴群は明らかに時期的に併存している。

もう1点は、尖頭形横穴とドーム形横穴の混在である。この混在する例として、東名高速道路建設に先立ち調査された岡津横穴群A群（ドーム形）・B群（尖頭形）、本村横穴群A群（ドーム形）・B群（尖頭形）をあげることができる。この2例は、尖頭形とドーム形という異なる形態の横穴が同一丘陵上に築かれているのである。

この2点は、横穴式石室と横穴という墓制の相違、横穴という共通の墓制のなかでの尖頭形とドーム形という形態差が基づくところの要因……被葬者の性格、また造墓の際の占地という点についても重要なポイントであると考える。

#### 《参考文献》

- (1) 平野吾郎ほか 「遠江の横穴群」本文編 静岡県教育委員会 1983
- (2) 平野和男ほか 「掛川市岡津横穴群（A群）発掘調査概報—東名高速道路建設に伴う発掘調査一」  
掛川市教育委員会 1966
- (3) 向坂綱二ほか 「掛川市本村横穴群・本村古墳（第1号・第2号）発掘調査概報—東名高速道路建設に伴う発掘調査一」 日本道路公團 1966
- (4) 掛川市教育委員会 「掛川市遺跡地図」・「掛川市遺跡地名表」 1983

第2図 横穴配置図



## 第II章 調査の内容

今回の調査では全部で4基の横穴を検出、確認した。一つの横穴群の調査としては検出された横穴数は極めて少なく、つまり規模としては小さなものであると言える。いずれの横穴も遺存状況は決して良いものではなかった。

検出された横穴は、その出土遺物より第2・3・4号墓は古墳時後期（6世紀後半～末葉）に属するものであるが、第1号墓は出土遺物が全たくなため時期を明確にし得ない。しかし形態的にはいずれもドーム形であることから同時期の所産としてとらえたい。

出土遺物は、須恵器では提瓶と脚付碗の2種類だけで、最も一般的な杯は破片すら検出されなかつた。須恵器の他には土師器の高杯・脚付壺・小型高杯・壺がある。鉄製品では鎌・刀子・両頭金具・円筒状金具が、装身具ではガラス小玉がある。第2・3号からは人骨も出土している。

次に今回確認した遺構・遺物のようすを項目に分けて説明していく。

### 1. 遺構

#### 第1号墓

第1号墓は調査区域に於いて、谷部の奥に位置しており、全体のレベルからみると中位を占め、標高約54mを測る。

調査開始以前より1.5m程開口していた為、その存在は確認されていた。主軸はN-44°-Eを示す。遺存状況は悪く、特に両側壁部から天井にかけての崩落が著しく、その崩落土が覆土として50cm程堆積していた。

玄室中央部に最大幅を採るものその平面形は隅丸方形に近い。玄室と羨道部との区別は、玄門が急激に狭少することによって明瞭で、主軸ラインよりやや西側に設けられている。天井部は完全に崩落しているが、壁面の立ち上がりの形状からドーム形と考えられる。

羨道部は全長1.02m、幅は玄門部にて0.6m、羨門部にて0.4mを測る。玄室の大きさに比べ羨道部は極端に小さく、また前記のように主軸ラインより西側にずれて造られているという特徴をもつ。羨道部の前面には台形状に開く20cm程の段差が設けられている。長さは40cm弱で、それ以上は崩落した可能性もあるが、いずれにしても現状では墓前域とは考え難い。

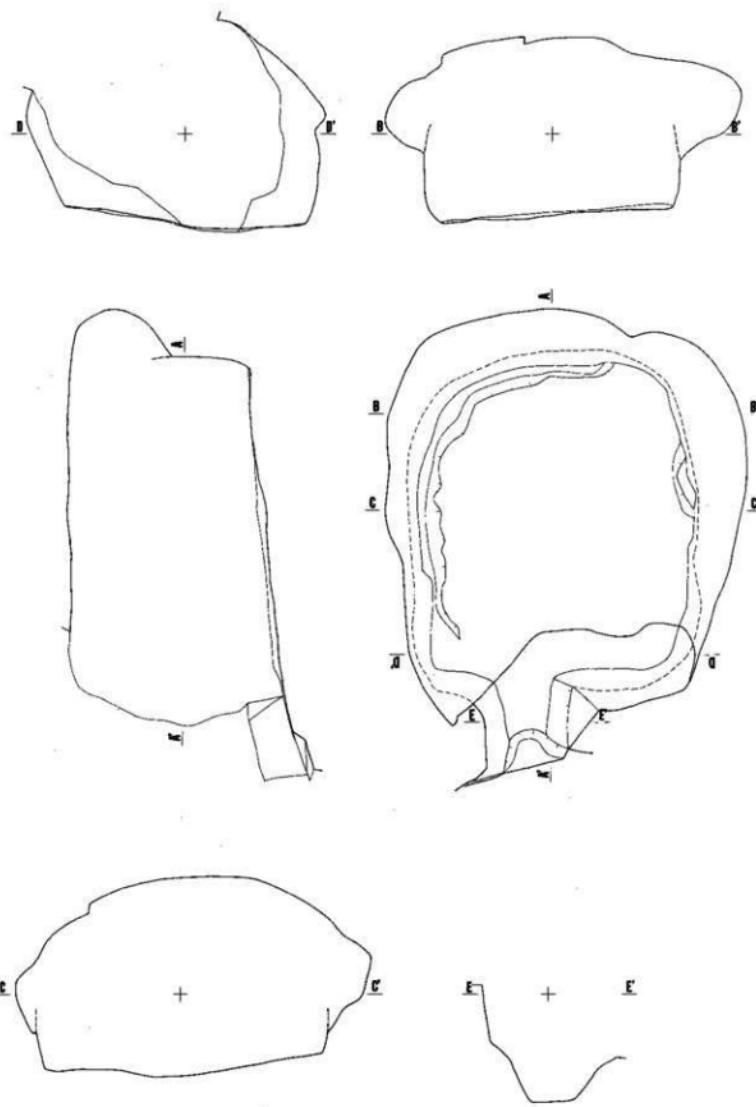
玄室は全長3.24mを測る隅丸方形に近い平面形であるが、厳密には奥壁より2m程の部分より羨道部にかけてやや幅が狭くなる。奥壁よりの幅の広い部分では最大幅3.0m、玄門よりの最大幅は2.6mを測る。

床面は中央がやや窪んでいるものの全体的にはほぼ平坦で、玄室奥から羨道部にかけて緩やかに傾斜し、玄門付近では5cm程の段を有す。玄室床面上の奥壁際から西壁際にかけての部分と東壁際の一部に幅20~30cm、深さ4cm程の溝が検出された。恐らく排水溝と思われるが、玄室内を全周しておらず、羨道部にも認められなかった。

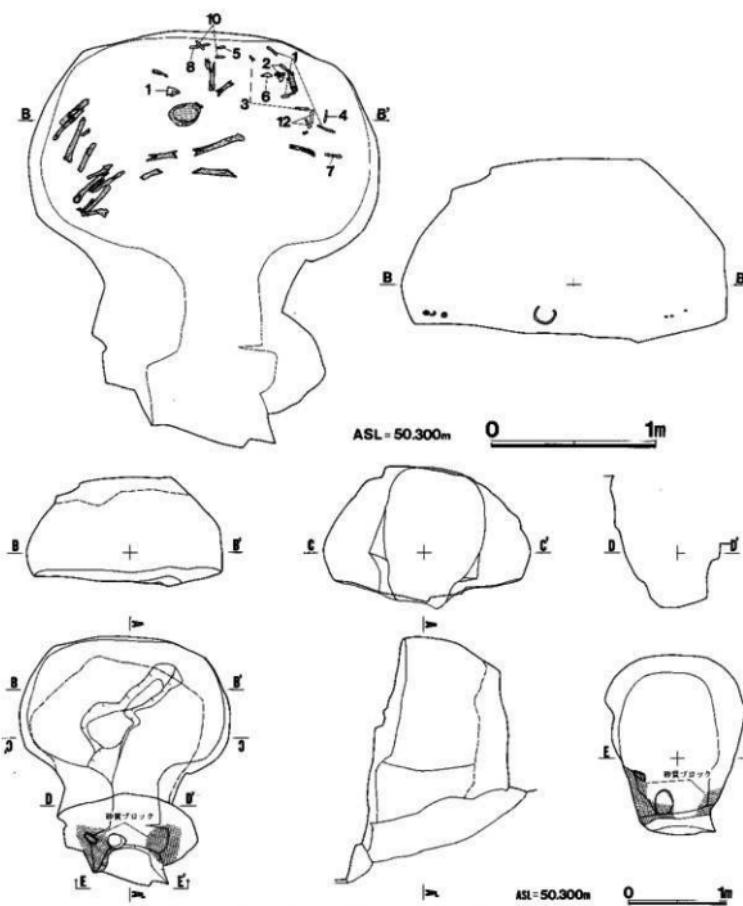
遺物は何も検出されなかった。

#### 第2号墓

第2号墓は南斜面の標高50m程のところに位置し、全体のレベルからみると下位を占める。その東側約3mの地点には標高をほぼ同じくする第3号墓が存在し、当横穴群内ではこの2基だけが単位群



第3図 第1号墓実測図



第4図 第2号墓出土遺物平面実測図・第2号墓実測図

を構成している。

未開口の状況で遺存したものであるが、閉塞部に用いられた砂質ブロックと河原石は、床面より30cm程が遺存したのみで、それより上には暗褐色土が天井付近まで充満していた。羨道部から奥壁にかけての天井は崩落しており内部の遺存状態はあまりよくない。

主軸はN-32°-Eを示す。玄室中央部に最大幅をもつ圓丸形を呈す。天井部は崩落しているが、壁面の立ち上がりの形状からドーム形と考えられる。

閉塞施設としての砂質ブロックは羨門の両袖部にあわせるように加工して充填されている。砂質ブ

ロックの他に河原石も検出されており、閉塞施設として併用されたものであろう。羨門部は最大幅0.9m・奥行0.42mを測る。また羨門部の前面には第1号墓同様に台形状の10cm程の段差が確認された。

羨道部は全長0.62m・最大幅0.84mを測る。羨道部床面から50cm程の羨道部両壁面には幅10cm程のテラスが設けられている。

玄室は平面形で奥行よりも幅が広い隅丸方形を呈し、その規模は全長1.30m・最大幅2.15m・高さは推定で約1.00mを測る。

床面には玄室中央に不整形な溝状の窪みが検出されており、その窪みに向かって床面は傾斜している。

出土遺物は玄室奥壁部から右壁部に沿って鉄錐（1～11）、刀子（12）、両頭金具（13）、円筒状金具（14・15）の鉄製品がまとまって出土した。玄室中央部から左壁部にかけては人骨が集中して検出された。土師器高杯脚部片（1）は覆土上層からの出土である。

### 第3号墓

第3号墓は第2号墓の西側3m程に位置し、標高は第2号墓と同じく約50mを測る。第2号墓より更に小規模なもので、当横穴群中でも特異なものと言えよう。

未開口の状況で遺存したものであるが、開口部西側に砂質ブロックと大型の河原石2個が検出された以外は天井付近まで暗褐色土が充満していた。側壁から天井にかけては完全に崩落しており内部の遺存状態はよくない。

主軸はN-22°-Eを示す。平面形は不整形な隅丸方形を呈しており、玄室・羨道等の明瞭な区分はない。遺存長は1.53m・最大幅は0.77mを測る。奥壁は遺存する部分の立ち上りから弧状を呈して天井部へ繋続するものと考えられる。

床面は、奥壁際を最高位として開口部に向かって緩やかに下降し、開口部から前端では更に急傾斜になる。西壁際から床面にかけては斜面になっている。排水溝等の施設は検出されなかった。

閉塞施設は前記のように砂質ブロックと河原石が併用されている。検出されたのは西壁際のみであったが、両壁際に充填されていたものであろう。

開口部前端には「ハ」の字に開く最大幅1.57m・奥行20cm程の側壁が設けられているが、その床面は流出しておりその全容は明確にし得ない。

出土遺物は土師器高杯（2～8）、土師器脚付壺（9～12）、土師器小型高杯（13～16）、土師器（17）、須恵器提瓶（18）が玄室内より検出された。人骨（歯）の一部も少量ながら検出された。

### 第4号墓

第4号墓は南斜面の標高59m程の最上位に位置する。未開口墓であったが、玄門から羨道部分にかけての天井が完全に崩落しておりその崩落土が覆土として天井付近まで充満していた。

主軸はN-39°-Wを示す。形態は天井が崩落しているが、壁面の立ち上がりの形上からドーム形と考えられる。

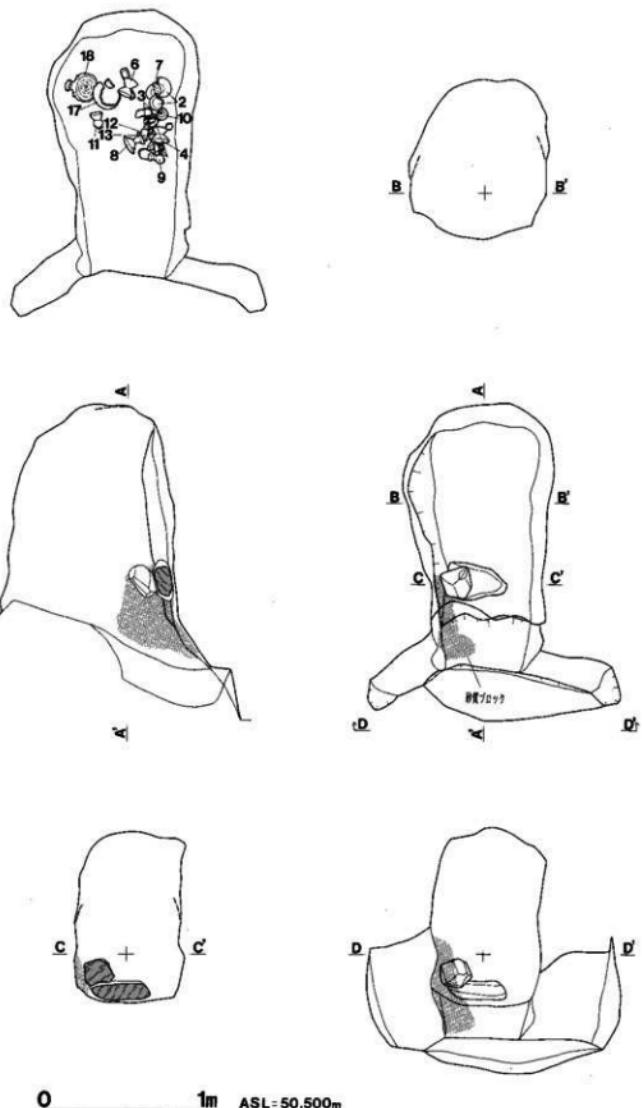
閉塞施設は上部の一部を除いてほぼ完全な形で検出しており、その規模は全長1.18m・最大幅0.95m・高さ1.14mの範囲で長さ20cm前後、厚さ10～20cm程の河原石を積み重ねている。根石にあたる部分では砂質ブロックが用いられている。

羨道部は全長3.24m・最大幅0.87m、玄門と羨門の比高差1.15mを測る。

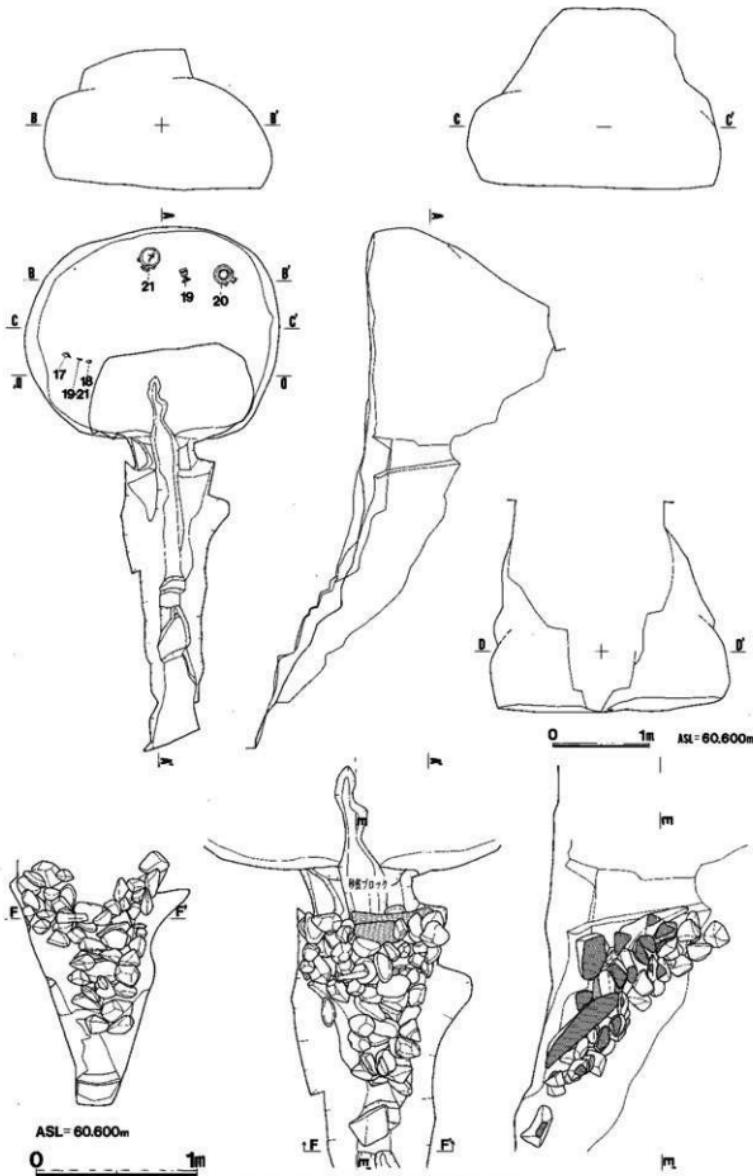
玄室は丸味の強い隅丸方形を呈しており、全長2.13m・最大幅2.64m・推定高1.0mを測る。

床面には玄門寄りの部分より、羨道部の底面と連結する排水溝が検出された。

出土遺物は須恵器脚付壺（19）、提瓶（20）が玄室奥壁部寄りから出土した。また鉄製品は鏃（17～19）、刀子（20・21）が玄室左側部から集中して出土した。装身具ではガラス小玉が出土した。



第5図 第3号墓出土遺物平面実測図・第3号墓実測図



第6図 第4号墓実測図・閉塞実測図

## 2. 遺 物

今回調査した4基の横穴のうち第1号墓を除く3基から遺物が出土している。

第2号墓からは土師器片と鉄鐵・刀子等、第3号墓からは須恵器・土師器・刀子の茎と思われるもの、第4号墓からは須恵器・鉄鐵・刀子・玉類が出土している。この三十八坪横穴群A群の特徴として、須恵器・土師器を問わず杯類が出土していないことである。

ここでは、土器、鉄製品、玉類の順に概略を述べる。

### i) 土 器

土器は、第2号墓、第3号墓、第4号墓から出土している。横穴順に出土土器の概要を記す。

第2号墓出土土器（第7図-1）

1は土師器高杯の脚部と考えられる。脚部と杯部の接合部分は太く、直径5.5cmを測る。

第3号墓出土土器（第7図-2～18）

第3号墓からは、土師器高杯7点・土師器脚付壺4点・小型の土師器高杯の杯部の破片と思われるもの3点・土師器高杯または脚付壺の脚部破片と思われるもの1点・土師器壺1点・須恵器提瓶が1点出土している。

土師器高杯（第7図-2～8）

2は、口径10.45cm、器高7.6cmを測る。杯部外面の上半はナデ調整、下半はナデ調整の下に縦方向の刷毛目がわずかに残る。3は、口径10.6cm、器高9.0cmを測る。杯部外面の上半をナデ調整、杯部外面の下半と胸部外面の上半は、縦方向の刷毛目調整の後ナデ調整を施す。脚部内面は板ナデ調整を施す。4は、口径11.5cm、器高8.3cmを測る。杯部外面の上半と脚部外面はナデ調整を、杯部と脚部の内面に板ナデ調整を施す。5は、口径10.55cm、器高8.5cmを測る。杯部外面上半と脚部外面にナデ痕が残る。脚部内面には板ナデによる調整を施す。6は、口径9.95cm、器高8.9cmを測る。杯部と脚部外面に縦方向の刷毛目調整を施す。杯部内面下半に板ナデ調整を施す。7は、口径9.7cm、器高9.35cmを測る。脚部外面は、縦方向の刷毛目調整の後、ナデ調整を施す。8は、口径12.8cm、器高10.6cmを測る長脚の高杯である。杯部の外外面にナデの痕跡が残る。

土師器脚付壺（第7図-9～12）

9は、口径3.7cm、器高7.0cmを測る。体部外面に縦方向の刷毛目が残る。10は、口径3.8cm、器高6.2cmを測る。体部外面に斜め方向の刷毛目調整を施した後、ナデ調整を施す。口縁部と脚部の内面にナデの痕跡が残る。11は、口径4.3cm、器高7.2cmを測る。体部外面に横方向の刷毛目調整を施した後、ナデ調整を施す。12は、口径4.2cm、器高7.2cmを測る。体部外面下半に斜め方向の刷毛目調整が残る。

小型土師器高杯（第7図-13～16）

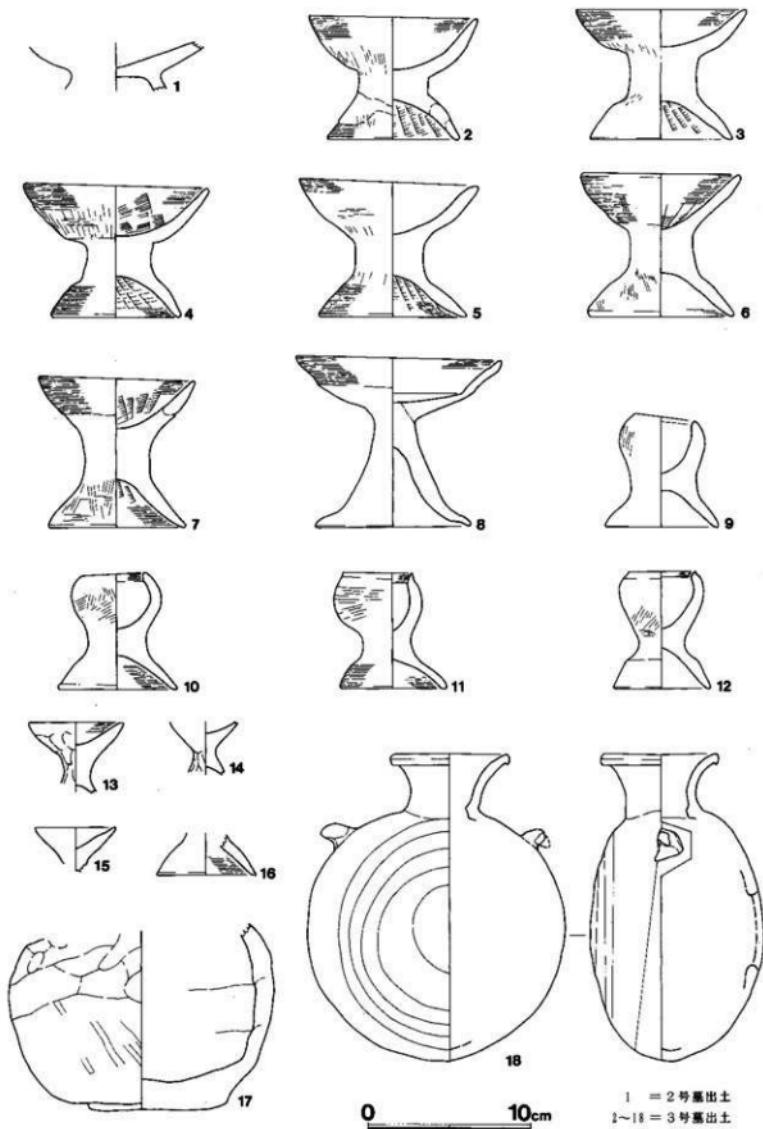
13は、口径5.8cmを測り、杯部から脚部の外面に指頭圧痕が付く。14は、口径4.2cmを測り、脚部外面に指頭圧痕が付く。15は、口径5.0cmを測る。16は、高杯または脚付壺の脚部と思われる。

土師器壺（第7図-17）

17は、口縁部を欠損するものと思われる。器高は現存で11.5cm、最大径は16.4cmを測る。体部外面の上半には横方向のナデ調整を施し、下半には斜め方向の粗い刷毛目調整を施す。

須恵器提瓶（第7図-18）

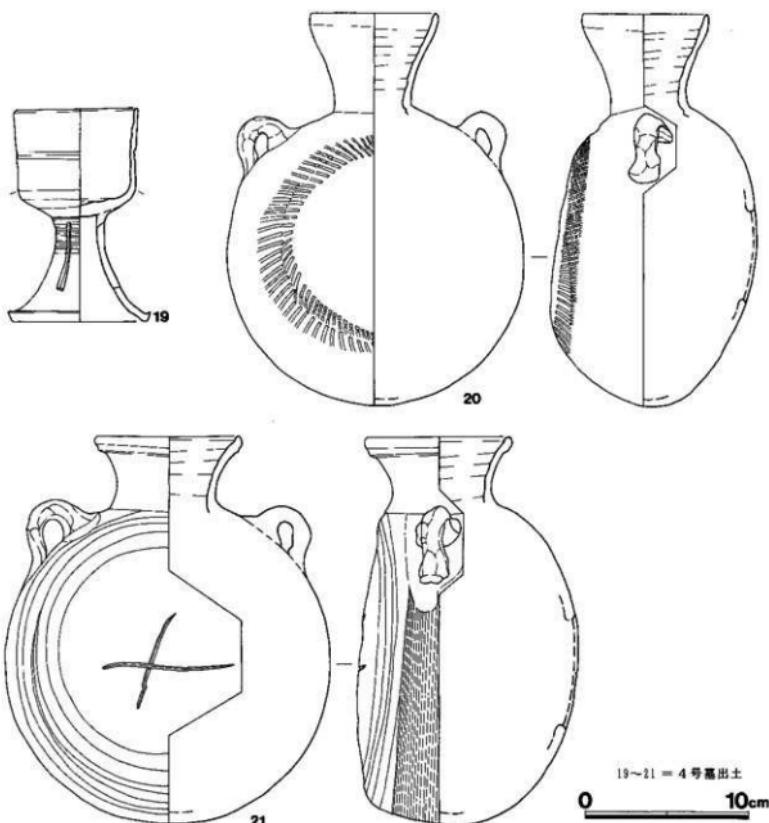
18は、口径7.4cm、最大径15.9cm、器高19.0cmを測る。体部の側面に鉤状の把手が付く。



第7図 出土土器実測図(1)

1 = 2号墓出土  
2~18 = 3号墓出土

0 10cm



第8図 出土土器実測図(2)

#### 第4号墓出土土器（第8図-19~21）

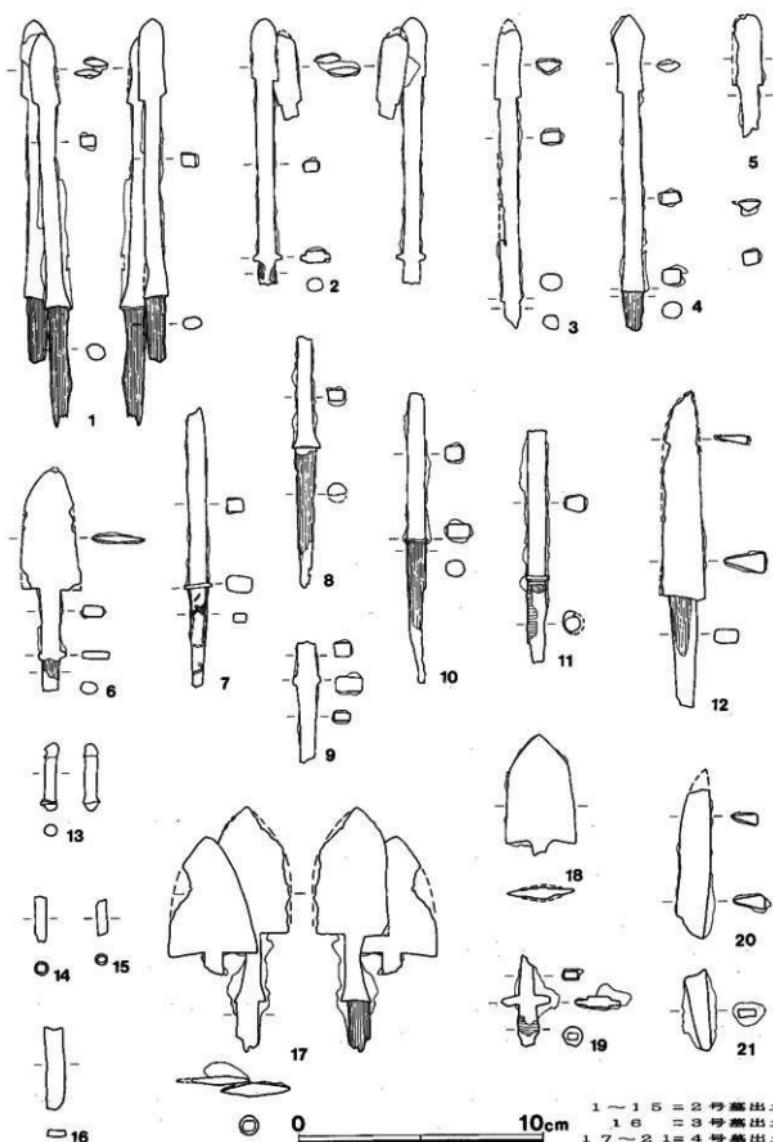
第4号墓出土土器には、須恵器脚付塊・提瓶2点がある。

##### 須恵器脚付塊（第8図-19）

19は、口径7.65cm、器高13.1cm、底径8.7cmを測る。体部外面中央に2条の沈線が巡る。また、体部外面と胸部外面の上半にはカキ目調整が施される。脚部には長方形の透かしが3方向にはいる。

##### 須恵器提瓶（第8図-20・21）

20は、口径7.9cm、最大径18.3cm、器高24.15cmを測る。口頸部の接合部分は細く、口縁部にかけて大きく開く。21は、口径9.05cm、最大径20.0cm、器高23.75cmを測る。口頸部の接合部分は太く、口縁端部は丸く作る。体部の円盤状の蓋をした方とその反対側の両面に「メ」のヘラ記号がある。



第9図 出土鉄製品実測図

1 ~ 15 = 2号墓出土  
16 ~ 19 = 3号墓出土  
17 ~ 21 = 4号墓出土

10cm

## ii) 鉄 製 品

鉄製品は、第2号墓、第3号墓、第4号墓から出土している。横穴順に出土鉄製品の概要を述べる。

### 第2号墓出土鉄製品（第9図-1～15）

1は、長三角形式の尖根鐵が2本錯付いたもので、ともに明瞭な闇を作る。茎には木質が残存する。2は、長三角形式の鐵が2本錯付いたものである。うち1本は、棘莖被が残存しており、茎には木質が残る。3は、長三  
角形式の鐵で片丸造と思われる。莖被は、錯による剥落が著しい。4は、明瞭な五角形を呈する。両丸造と思われる。茎には木質が残存している。5は、莖被の部分で欠損する。片丸造と思われる。6  
は、根の側面の片側が直線的で、片側がゆるく曲線を描く刀身形を呈する平根鐵である。棘は両側面に張り出すだけで全周はしない。茎に木質が残る。7は、尖根鐵の莖被で、棘が全周する。茎には、格子目状に残る織維質の上に木質が残る。8は、尖根鐵の莖被で茎に木質が残る。9は、尖根鐵の莖被で棘を有する。棘は両側面に張り出すタイプと思われる。10は、尖根鐵の莖被で、棘が全周するタイプと思われる。茎には木質が残存する。11は、尖根鐵の莖被で、棘は全周するタイプと思われる。茎には、桜と思われる樹皮が残存する。12は刀子で、刀身の長さは8.7 cmを測る。両面である。鋒から刃先にかけては鋸化による欠損がみられる。茎尻を欠損するが、茎には木質が残存する。13は、全長2.8 cmを測る両頭金具であるが、木質の残存はみられない。14は、現存長1.9 cm、直径0.5 cmを測る筒状の金具である。15は、現存長1.5 cm、直径0.45 cmを測る筒状の金具である。

### 第3号墓出土鉄製品（第9図-16）

16は、幅0.75 cm、現存長3.35 cm、厚さ0.25 cm、断面形は長方形を呈する。刀子の茎と思われる。

### 第4号墓出土鉄製品（第9図-17～21）

17は、三角形鐵と五角形鐵が2本錯付いている。三角形鐵は、莖被の部分で欠損する。わずかに返刺をもつ。五角形鐵の茎には木質が付く。18は、平根の五角形鐵で、莖被の部分を欠損する。19は棘で、側面に長く突出する。茎には桜と思われる樹皮が残る。17の三角形鐵の棘の可能性がある。20は刀子の刀身部分で鋒を欠いている。21は厚く錯に覆われているが、刀子の茎部分と思われる。

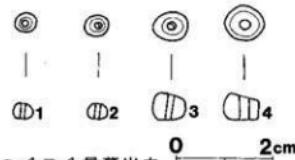
## iii) 玉 類

1～4は、第4号墓から出土したガラス製の小玉である。

1は、直径4.5 mm、高さ3.5 mm、穿孔の径1 mmを測る。2は、直径5 mm、高さ3.5 mm、穿孔の径1 mmを測る。3は、直径7 mm、高さ6 mm、穿孔の径1 mmを測る。4は、直径7 mm、高さ5.5 mm、穿孔の径2 mmを測る。色は、1が透き通った青色、2～4が紺色を呈する。

### 《参考文献》

- (1) 池上悟 「横穴墓」 ニュー・サイエンス社 1980
- (2) 平野吾郎ほか 「遠江の横穴群」 本文編 静岡県教育委員会 1983
- (3) 久永春男ほか 「伊越・社山古墳群調査報告書」 豊岡村教育委員会 1983
- (4) 柳原松司ほか 「大瀬ヶ谷・篠ヶ谷・西宮浦—静岡県菊川流域の横穴墓群調査報告書」 菊川町教育委員会 1983



第10図 出土玉類実測図

### 第III章 ま と め

今回の発掘調査で確認した横穴は、全部で4基であった。そしてこれらが構築・使用された時期は6世紀後半におさまることを確認した。一つの横穴群の調査としては規模の小さなものであったが、これらが投げ掛けてくれた問題は数多いものであった。ここではその一部を記し、今後の研究課題として掲げてまとめて代えたい。

1、横穴の基數について発掘調査当初の予測では、もう少し多くの横穴が検出されるものと思われた。周知のとおり掛川市域は、小笠郡下と合わせて静岡県内でも横穴群の集中する地域である。宇洞ヶ谷横穴<sup>(1)</sup>および山麓山横穴<sup>(2)</sup>のような首長墓的横穴は別にして、これまでに市内で調査した横穴群の状況から、6世紀中・後半以降にかけて構築された横穴群は、その多くが群集する傾向を示し、一つの谷に十数基以上の横穴が近接して（例えば一つの墓前域を共有して2基あるいは3基の横穴が構築されるように）構築されている。こうした状況と比較して、三十八坪横穴群の4基は、非常に少ない数によって群を構成しているがこれは何を意味しているのか。また、4基それぞれが比較的離れて構築されているが、こうした状況は何を意味しているのか。これらは、造墓集団がどのような性格の集団であったのか、横穴の被葬者がどんな性格をもった人なのかというような問題を投げ掛けているように思える。

2、今回検出した4基の横穴の形状を観ると、天井の残存状況は良くないが壁面の立ち上がりの形狀からドーム形の横穴を想定することができる。このドーム形横穴は、小笠郡内では多く存在する形態であるが、掛川市域では極僅かである。尖頭形の多い掛川市域にあって、なぜこの三十八坪横穴群ではドーム形が取り入れられているのか。

3、横穴の多くは玄室の外に墓前域という空間を持つが、今回検出した横穴のすべてに墓前域を検出しなかった。調査では表土の剥ぎ取りを重機の使用により行なったため、表土中に墓前域が存在した場合には表土とともに消え去った可能性もある。しかし、表土剥ぎ取りの際の立ち会いで閉塞石あるいは土器等の出土は確認されなかったこと、横穴が立地する山が急峻で、もし墓前域を広く作るとなれば地山深く掘り込むであろうということを考えると、この横穴群では墓前域が作られなかったようを考えられる。そうした場合、墓前域を持たない横穴と墓前域を持つ横穴との違いは何なのか。横穴墓の作り方の問題あるいは葬送の儀式の問題など多くの問題を投げ掛ける。

4、次に副葬品の問題を考えてみたい。今回検出確認した横穴はすべて保存状態のあまり良くないものばかりであったが、1号墓を除いて他の横穴からは何らかの出土遺物を得た。その内容については、先に紹介したとおりであるのでここでは列記することも控えるが、それら出土遺物の中にあって土器の類で須恵器の出土品が少ないように思えるのである。他の横穴はもちろんのこと古墳を調査した場合に、あたりまえのように須恵器の坏身あるいは坏蓋が出土することに対し、今回検出した横穴からは坏の破片すらも出土しなかった。このことは、当時の人々にとって須恵器という器がどんな価値をもっていたのか、また当時の葬送の儀式にあってそれぞれの土器がどのような役割をもってどのように使われたのかというような問題を含んでいるものと考える。

#### 註

(1) 向坂鋼二ほか 「掛川市宇洞ヶ谷横穴墳発掘調査報告書」 掛川市教育委員会 1971

(2) 平野吾郎ほか 「遠江の横穴群」本文編 静岡県教育委員会 1983

# 図 版





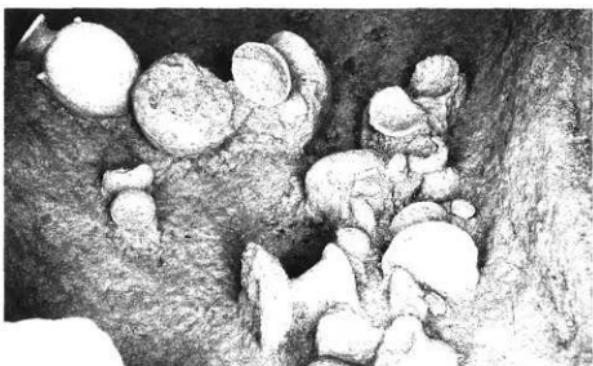
調査前全景(西から)



調査終了後全景(南から)

図版  
II





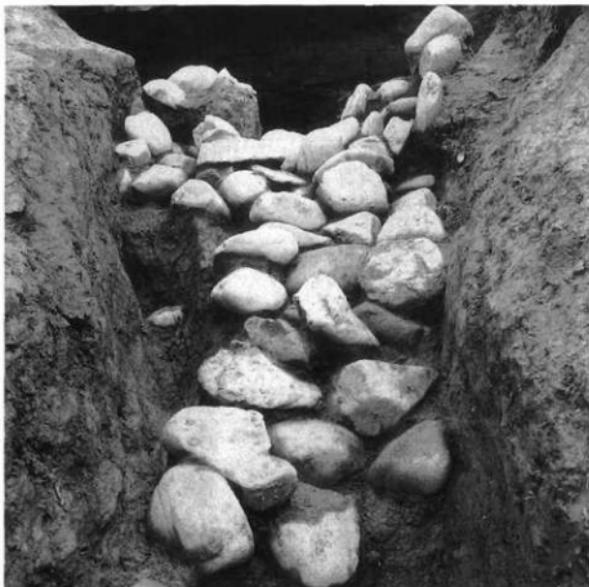
3号墓遺物出土状況



4号墓遺物出土状況



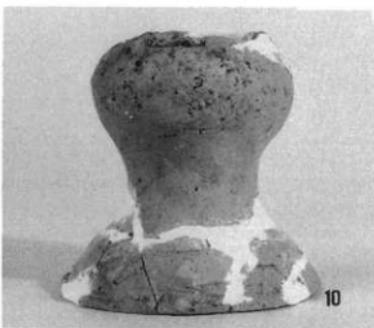
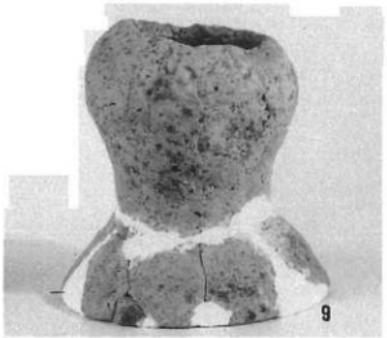
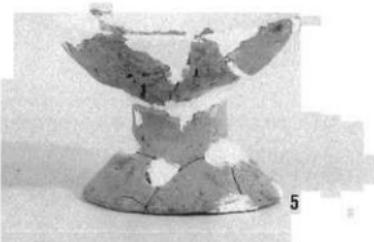
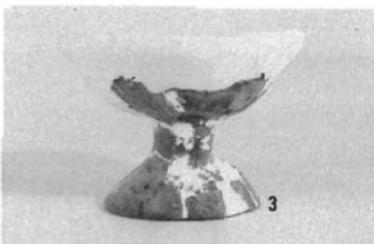
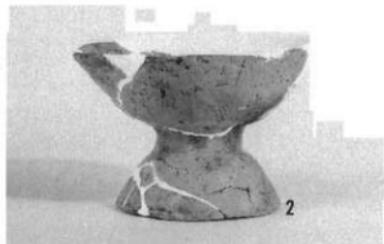
4号墓閉塞状況(玄室内から)



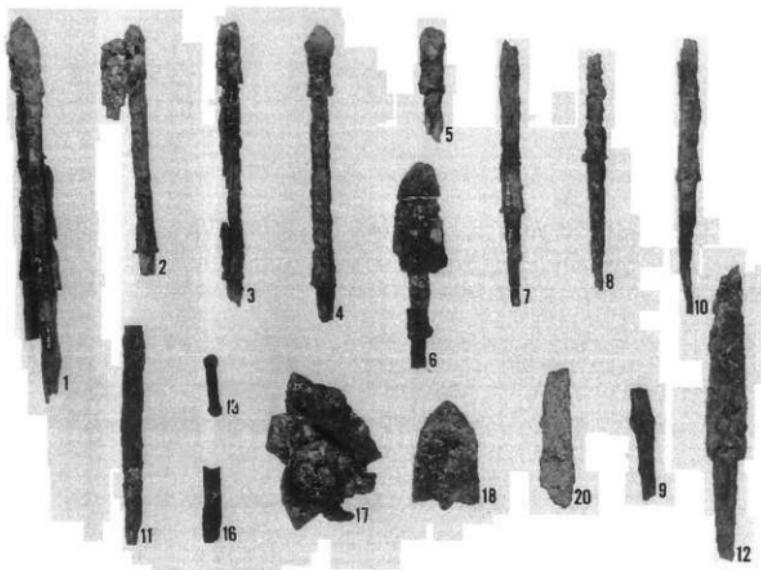
4号墓閉塞状況  
(羨門側から)



4号墓閉塞石除去後の状況  
(玄室内から)



図版 VI



**三十八坪横穴群A群**

発掘調査報告書

昭和63年3月31日

編集発行 挂川市教育委員会  
掛川市水垂51  
TEL (0537) 24-7773

印刷所 株式会社 三創  
静岡市中村町166-1  
TEL (0542) 82-4031

